

木村武山《阿房劫火》について—火焰と建造物の表現を中心に—

木澤 沙羅（茨城県天心記念五浦美術館）

木村武山(1876-1942)は、日本美術院を拠点に活動した日本画家である。《阿房劫火》(明治 40 年(1907)、茨城県近代美術館蔵)は、秦の始皇帝が造営した阿房宮が項羽軍に焼き払われ、その炎が 3 か月の間燃え続けた説話に基づく歴史画である。本作は第 1 回文展で三等賞を受賞し、これまで武山の代表作と位置付けられてきた。

本発表は、近代日本美術史における本作の意義を再検討するものである。その方法として、まず阿房宮の説話を描いた他作品と比較し、本作の表現上の特質を明らかにする。次に図像の着想源を検討し、さらに歴史画と朦朧体という同時代の美術の潮流における本作の位置づけを図る。

阿房宮の説話を描いた他作品には、伝 谷文晁《霊台、阿房宮図双幅》(制作年不詳、所在不明)、菊池容斎《阿房宮図》(天保年間(1830-1844)、静嘉堂文庫美術館蔵)、荒木寛畝《阿房宮》(元治元年(1864)、東京国立博物館蔵)などの作品がある。これらの作品には、勸戒画の一種である帝鑑図としての性格が見出せる。またこれらの作品が個人の鑑賞を前提に制作されたのに対し、《阿房劫火》は展覧会会場で不特定多数の鑑賞者に見られることを想定して制作された。そのため画面が大きくなり、展覧会会場を意識した表現に発展した。

本作における火焰の表現は、《伴大納言絵巻》(12 世紀、出光美術館蔵)や《平治物語絵巻》(13 世紀後半、ボストン美術館蔵)などの絵巻から学んだ火の粉の表現と、朦朧体による火焰の表現を融合していると考えられる。さらに建造物の表現では、狩野派の帝鑑図や楼閣山水図から引用した相輪の表現と、中国における煉瓦作りの城壁の視覚情報を融合している可能性が指摘できる。

武山は、火事によって建造物が破壊される壮大な様子を表現するために阿房宮の説話を画題に選択した。当時の歴史画は、人物の感情が表現されているかどうかによって評価されたが、武山は本作で敢えて人物を描かず、火焰と建造物のみで画面を構成している。このことから武山がそれまでの歴史画の前提を越えようとしたと解釈することもできる。

加えて本作では、色彩の混濁が指摘されてきた朦朧体と、鮮やかな色彩が両立されている点が注目される。武山は初期の頃から、色彩について高い評価を得ながらも、一方で朦朧体批判も受けていた。本作においては、朦朧体批判の要因とされた、色彩によって輪郭線を描く彩線と伝統的な墨線が画面上で使い分けられ、色彩の混濁がなく、鮮やかな色彩が維持されている。

以上により、古典に学びながら同時代の表現や視覚情報を取り入れたこと、伝統的な線を残しつつ、朦朧体と鮮やかな色彩を両立したことなどから、《阿房劫火》には新旧の表現や価値観を融合する制作態度が表れており、武山の画業の中で重要な分岐点となった作品であると結論づける。